



南嶺子

四

1 曾 5
77
4 止



南山領子卷之四

秋齋桂先生著 松尾守義 山中秀蕃 同校

○猿樂サレガクといふ者。神樂カミガクの餘ヨリ見ミよよと神カミの字ジの旁ワリのと用ヨひ申樂サレガク

といふが。正説よの。一説あり。又神代卷不。猿女若祖天細女命。神樂と

舞始一。事なる。猿女氏より舞ひし。ゆかり名ふ。うりて猿樂といふ

のほりあり。然れは禁秘御中卷。可遠キト凡賤事條。曰。況如猿樂サレガク参マ

庭上可止事也。○明月記寛喜二年閏二月乙巳イノチ至子建久下

衆猿樂被召ササヒ。仍モト可召侍猿樂由所申也。下流猿サレガク承上ウケはを

救世家業ケウセカゲと云ふ者あり。侍猿サレガク承上ウケはを人の魁カサシ藝ゲイありと。

家業カゲをうウらふものなりと云ふ。神樂サレガクをうウらふ文フミありと云ふや

門 曾 5
77
4

六十六

南嶺

卷四

清女御の枕蓑紙をよめ儀ふつとこの世もよめ御もよめ
 とのこをあつて字法於遠海邊小御神樂のよめをよめ
 かつとあつとよめを樂人兄弟尻とまうつてつとあつとよめ
 とのよめをよめを唐の教樂といふよめをよめをよめをよめ
 字をよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 古語成語をよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 教笛拍子よめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 古く今とよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 ○たか屋の人のよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ

いひあつて腰小袴のうとらうまてまぬとてねの落葉をよめをよめ
 もよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 んやとよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 ころの大板をよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 見へつと。

唐の魏徵天子み奏してゆを臣をよめをよめをよめをよめ
 終るよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 みあつとよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ
 君の仇み死して昔よ忠烈あつとよめをよめをよめをよめ
 とよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめをよめ

ふく國のれれなく君こそ懐とこハ安くして愛をいひてとほむのれ
 治世の良臣忠臣の名と當つがあめ君を全うする人の志良からねた
 かりうね事々魏徴傳み見たり

○少々の内いへゆくそ駿河國吉原といふ所へ渡邊長藏といふ豪
 農のといふ十田又目も逗留りたり長藏元たるがうめく学問々業を東
 涯先生み受書法を廣澤公羽より学びく屋邊一室をひめ書と讀
 て閑と親ゆると弓馬の故実をうかりあひふ一日富士権現社にも
 ありれ芝川苔布愛うかりみ休に渡邊氏りう々富士塚定こく
 顛へのりう時あり終宵みのり岩陰よまらわらぬよお月出ると来途
 とそあれありふほく出くねとをいへる観音勢至の三尊日の中

めあはるくそははらるまむ野筆のりそは来途とてあつたふませ出て
 足らぬ山のまがよまむじひお月をぬのりの振ゆるりるれいめその
 内は三尊のいふに形足る日の内よりやはなえん方なくみやびやふ光と
 るまのぼるくあやとこむくやあじとあまほく考てうあづいて見れ
 る三尊のまうあづいふそはねけそ三尊のほねくそそそふまのうつろお
 めて目小映とそらうくあやくとあまほくそ有るくおほり高の
 のいそ三目のまが方あうてほゆるびとくうりどくをせろふうらまき
 まるのうけきそ石も佛とあまほくそふたみまを揃むも山城なり
 んのをまづりかじや

○古き寺にの庵魔王の平といふあわのそとらばは極あへる信

と成り其平と云ふ木下下て多くを壽の字福の字なり。杉浦は
 あも二テホありて見しむいあうあう人々も是を敬れまじと云ふ
 海と云ふ。と云うていよく後世に又阿彌陀如来の此平末と云ふ
 極ふくまううあふ僕と云うていよくあ人の言悪くいまあまむに法
 のあうり看ても終は信もあうあうありた。是もあふ極あゆくの理
 わらや極木の末門を相撰歌録はかしの関口と同じるありや。今世の
 かま邪智も猶も人々も惑はるるといふはまをま一向経の平家
 物語も阿闍世王のもしく法華八講をおもひに。借偽一人は
 とて杉浦圓清池寺の住持を坊主を名とせしむに五た真官の書
 母年号は家大日本年号と見しむ。地獄極樂も大日本の暦下

と云ふ。慈心坊真土のゆりてとくは清浄なりと云ふ。あふその
 時おまやりの圖との下といふお今不復不修なり。是と云ふは。あ
 今も極あゆむをを善と修せむはかか各あつべし。可く

○に外か理を求て修りてむくさうと修らるる感ひた中に理と云うて
 格物致知も心と云ふ。天地のろく限あり。人の智も限ある水は流れ六
 止りあつての心は何ぞと云ふ。あまの力と云ふ。あはたと修らるると云うて。あ

坊主

○慈心の礼世若水安善寺やけり。今同。そのは源照くつ育人五

條坊門鳥丸東へ入處より。東山よりして建。源照後小松院の御
 らんと云ふ。あう。あて業衣と知りぬ。是より育人も業衣と云ふ

るとぬふま。又日記に建業福市とあり。いづれの附より。検校と申向あり。
といふ名目どもともありて。むしといは殊あるなり。

○平宗盛公のむすねれ。ゆやといふ女のり。この地をよびて皇后宮
大夫師時卿の記。号長秋記。みま女久万乃とのをらなり。然り後況とて
うすいんそ。ゆや後現。みま女。ゆやといふ名あり。謠曲も
その謠よまごびいとるなり。いふも女の名盛代と申あり。とありて
あもあはひり。

○一とを越の敷をよびて。合持と新田我員のまもられり。
城社ありて。風景殊ふとられ。八月十五日。おをうた。上宮ハ海の
ねりて二十五町とて。なる門人古方を詠詠して。盃酒醉をよびは。

梅屋のあふもこのきり。青人そめるもり。と梅といふ字もま訓いさ

ありて。いひゆく青ハカイ。請も。ウミ。といふより。ゆまら。とく

し。小徹。青人あざもり。して梅をよび。海月とらげ。海人をあま

海苔とのり。海流とす。あま。とよむ。こい。ア。も。ア。も。ア。も。

ナ。も。よむ。聲あふら。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

今ま。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

○可成。小。主水とモント。とよみ。掃。掃。とカモン。とよむ。い。い。

い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。い。

此寺に... 観る... 硯を... 庫小... ありて... 神威... 院己講...

あり不律の僧ありて山と誰... 誓約... 鈴曳之啓白... 有犯罪... 僧侶... きの... あり...

○ 疱瘡... あり...

南鑑...

小其見を優よ至家如大量の君子ありて。痘鬼と祭る事と禁し感よ
 もあまを致せし罪よ元家道なりて。痘をやはも鬼を優けり。之
 を善人よふれを致せし其れは報し。愚悪の人を。是と致せし其れ
 致小業して。驕慢さうりぬるる。邪靈を致し人。其れは報して。思
 張行感ふらうの理し。ふづ。痘鬼は。あま。其れは胎毒の。し。ゆ
 理儒者流の説の。然其終と。め。痘を。し。地處。小あり。その。理
 胎毒を。て。を。さ。い。あ。鬼の。を。は。ま。の。ふ。は。思。小。お。し。て。を
 あ。の。酒。の。を。合。を。求。じ。る。し。し。て。致。し。今。は。思。小。ふ。あ。は。大。人。を
 も。賤。鬼。よ。屈。伏。し。と。嗟。呼。あ。ら。う。な。ら。ぬ。
 ○蜘蛛よ畏れ暮よ色と夜より顔を活物をれをさもあはれ。一。業。致

小名より。一。半。仲。といひ。優。曲。の。者。々。刀。豆。子。畏。れ。色。夜。の。魂。と。生。ふ。
 是と秘して和物ふして出れ。よく知りて其れは。を。あ。り。ゆ。ゆ。又。等。の
 手術ふ妙ある。医人あり。高麗。藥。餅。と。名。を。い。ふ。色。青。く。なる。畏。る。事
 甚し。苗。垣。氏。で。て。但。馬。山。石。と。い。ふ。處。め。も。刀。豆。子。畏。れ。色。と。秘。する
 蛇蝎の。よく。め。げ。ま。い。い。人。あり。と。と。ま。う。し。し。り。所。謂。と。ま。い。は。れ。を。藥
 の。相。畏。る。理。も。お。し。て。記。し。り。ぬ。や。

○續日本紀第四元明天皇 和銅四年の文とる。後天。又。み。末
 穀。と。并。あり。首。伯。小。五。石。七。斗。を。採。り。を。後。の。貴。さ。る。り。か。ぎ。り。な。り。と。記
 以。百。姓。奢。る。る。ゆ。ゆ。食。め。之。し。さ。る。り。し。り。首。伯。と。い。ふ。百。姓
 ○天照皇大神々朝家の宗廟なり。公卿百官といふも。私。を。あ。る

め多く。食品めおびに禁と候も故ぬ。胎毒深くて發するの瘡
 かねをいと。上旨竹葉茶の人の先とくけは。瘡を治らすのゆゑよく
 赤とんころしう。ひら地の人々今も是とやまは。言ひたすても。辛辛み
 ひらままで。瘡癩をば。身ゆり。ちん八人の。足ありぬ。癩おめて。ぬあ
 らる。ぬ。肉中。まら。付。崩。好。で。是。ぬ。つ。ぐ。と。く。瘡。氣。と。察。して。鬼。托。
 よろ。とい。狐。の。こ。ご。ご。と。う。ぐ。一。や。岡。山。處。め。て。ん。瘡。鬼。ある。處。に。狐。と。び。い。
 ぬ。あ。く。とい。ぬ。り。妖。怪。とい。ぬ。お。十。ぬ。九。を。狐。狸。猫。の。石。を。を。り。人。其。呪。ま。ぬ。
 ぞ。を。な。り。づ。き。ぬ。あ。ら。ん。だ。

○野狐を敬して。榴生の神號を潜し。福と祈り。慶と求む。頑直の匹
 夫。世小甚多し。ぎと。野狐。小。ら。れ。き。て。家。し。け。術。あり。も。今。て。獸。

手とく。敬。辱。して。恥辱と。心。を。ま。る。人。外。の。論。と。ま。る。も。益。な。れ。た。吉。吉。吉。
 禮。儀。と。狐。は。ゆ。づ。ら。る。後。ま。て。悲。し。む。一。金。銀。と。野。狐。の。細。小。ぬ。ぬ。
 あ。く。い。あ。る。づ。の。野。狐。と。ぬ。を。を。あ。ら。る。他。の。寶。と。盜。来。ら。ぬ。と。ゆ。づ。
 わ。と。ん。や。巫。理。の。も。め。も。あ。ら。ぬ。僧。侶。狐。の。力。と。假。て。加。持。祈。禱。し。憑。を。
 して。幣。と。搵。ぬ。是。這。僧。即。狐。の。同。類。を。り。釋。迦。如。來。一。代。の。諸。經。小。
 野。狐。の。力。と。假。て。祈。禱。す。と。あ。り。ぬ。や。り。ぬ。の。福。を。も。人。の。い。と。と。
 名。つ。け。生。冥。く。托。し。て。死。冥。を。い。づ。と。と。お。づ。り。て。狐。を。か。り。其。信。の。の。と。
 む。い。と。善。ん。經。力。と。く。さ。や。の。る。も。い。の。う。と。な。と。何。ぞ。狐。か。と。う。ん。や。各。
 其。善。と。と。う。經。ま。で。と。人。ふ。や。一。ゆ。き。狐。の。力。と。く。ふ。也。疑。を。を。ん。と。ま。ま。
 狐。ら。り。つ。る。と。い。ぬ。あ。く。人。回。獸。を。其。信。し。を。け。ぐ。も。り。下。よ。づ。き。も。

のうへとてきざおのふ列ふるふ。是をなめして信じる後之げとわのうへ
ニ等下あつくはきざあさゆいふびや。

○近年神皇者といふもの出でてその門弟と名もの命号をいひて又そ
发名の下づこをまを名づけ。将衣降衣をよめるその謝礼を文原
あそ神を售る。順の和名抄ふに盜賊の首を列し我あまもろく如
くあり。天あふり命爵もなき人ゆを以命と称せんや。だんご米のそま
たれは。神皇の方より林をまぬと名づき。豆腐瓦の二部せられ。并に
松川た系と号するをの先伏をうけ。吳松なる名よいそさる。鳥帽子を
いふと。つづふあふおそれそふ。願ひをいふまう。その室を太神等いひまう
合長してつづふ。どの替名もく表向の人をうけつとまひ。その鳥帽子

降衣もく町内の出合をいふ。小いふまの宮はく系流もぬま。御れを習えとつ
表向もまうね。鳥帽子とけ。歌舞伎のしくまう。向ふの神を信ふ
他のるををねらう。いさあ。かち非礼を。神をれられをま人や。家あひ下
○僧侶はふ處ていさあや。佛書を漢書よてよび。佛書は呉音よ
てよあま。桓武天皇代勅は定ま。たとき。○類聚後國史百八十七
佛道部桓武天皇延暦十二年四月朔。丙子文曰。制自今以後。年分度者。非習
漢音。勿令得度。云。呉音を誑謬多く。經意を誤る。ある。即ち桓武帝の詔
みく。佛經は呉音を禁ざらう。萬世の通訳ある。佛徒舊龍衣とてあ
まひ。呉音を以て經を誑誦する。朝制よ承りといふ。唐國の
祭酒本。倍判語といふ。あま。呉音あま。まき多く。上聲と去聲と。き声

上声とさるの辨あり。日本紀略もと。延暦十一年十月。儒書ハ漢音小
よと習くとの勅あり。これに儒書佛書とも小呂音と有り。故
故實ふとひりり。

○仲尼衛に至る。靈公の夫人南子小召を相見。南子淫行の悪
名ある。後いゆき。門人子路説びざる。仲尼あはよ去て予否
之所の者あり。天厭之。天厭之の語あり。柳下惠ひり。夜ふ美
女一宿を請。ゆりてと命りし。ぬきた人。是と疑く。仲尼ハオある也
よとの門人へあひびびして。矢とて。柳下惠も方ち。ある也。衆人疑さる。
聖人りて。門弟子も。天き人のちひさ。即是聖人をあしめし。
後世の儒者の固きると。誠は天淵なり。

○大坂小坂仲とのわらふありて。和名の子小遠。萬葉集代述記。古今
其餘材集百人。首改親鈔。和字正濫源中拾遺。川社雜記。勢語。藤
談と始。叔於の書と著し。先達不却の語をふし。百人未登のて。我れと
ゆふ。まら。舊文は。微と取。後世の。名。流と。なる。多し。後。千載の
一人を。く。の。ぬ。ふ。た。萬葉と。て。主。く。後世の。名。と。得。ん。
くれ。わ。る。ふ。其。時代。ある。もの。少。て。當時。新。拾遺。以後。の。風。を。并。ら。ん。
が。如。く。集。と。撰。う。時。且。此。の人。の。名。を。だ。れ。ち。か。あり。て。も。時。の。風。は。あ。る。と。
れ。を。その。集。め。ら。れ。し。を。と。古。く。ふ。く。も。當時。の。風。は。あ。る。を。入。る。こ。
と。か。へ。ゆ。り。と。よ。と。さ。る。と。出。し。て。も。時代。の。風。を。こ。と。と。ゆ。ら。ら。る。判。り。
ま。ご。ち。を。親。と。し。ら。く。み。太古。の。萬葉。集。と。準。繩。め。て。後。の。名。を。綴。り。

南嶺子卷之四 終

書南嶺子後

南嶺在秋齊桂先生之

家鄉而南嶺子在江蘇

思繹述中而著之以俗語

說之以何說使讀者而曉

焉先生以

本邦典故之學鳴于世也南

只似子唯示臺學之

主之也而已書實某氏

物上梓蕃与松尾氏

校合再次也其在者也

未也

古詩集 卷之九

夏延巳已九月

内人山中游 竈秀蕃 漢海



